はえぬきど真ん中

真の断捨離とは

両親の家の遺品整理から、私の断捨離はスタートした。

母が他界し、すべてを母に任せきりの父は、貯金通帳のありかさえ分からない。手持ちのお金はわずかしかないと心配する父にかわり、金庫のカギを探すことからはじめ、各種手続き、葬儀、墓探しとひと段落ついた半年後、父は母のもとへ旅立った。

築年数のたった実家を手放すことにしたものの、それからが地獄の始まりだった。「もったいない」「いつか使える時が」としまい込まれた衣類や食器、お客様用布団類、母が仕事に使用していたコンパスや定規の果てまで、押し入れ、納戸といたるところに物があふれている。

業者に頼んで整理をすればよいのだが、父が母のタンス預金が見つけられないと言っていたことから、一つずつ確認しながらの作業を余儀なくされた。加えて、可燃・不燃・粗大ごみの仕分けが困難さを増す。思い出にひたる暇などなく、1階、2階と作業を進めなくては引っ越しに間に合わない。数カ月間にわたって整理した結果、廃棄物はなんと大型トラック2台分にもなった。

この経験から、私たち夫婦亡きあと娘たちにこんな思いをさせたくないと断捨離を開始した。以前から不要なものはできる限り廃棄していたが、何かの時に使うかもしれないものを捨てることにした。普段使いしないセットの食器類を皮切りに、靴は下駄箱に入る数量に限定し、新たに購入すると下駄箱から一足を廃棄することにして収納スペースにあわせた。服は、2、3年着用しないものは未使用でも始末するなど、家中の物の数量を減らした。

それでも、毎年服や日用品は増えていく。夫はなんでも取っておきたい人なので、書類は積み上がり、定年後体形が変化し着用できなくなったスーツなどがクローゼットに満杯だ。

一方、断捨離癖が進んだせいか、必要なものまで捨ててしまう弊害が生じた。最たるものは、衣替えの時にクリーニングに出す衣類を2袋にまとめたのだが、なんとそのうちの1袋をごみに出してしまった。翌年、冬用衣類がない!! 本当に困ってしまった。どうしてこんなことになったのか思い出せないが、部屋に鎮座した袋が不用品にみえたのだろうか。

近頃では、物がなくなると私が疑われるが、自分自身でも捨ててしまったかもとわが身を疑う始末。何事も行き過ぎはいけない。夫は、いつか自分も断捨離されてしまうのではと心配しているが、長年共に歩んだ時間や思い出を捨て去るほど人非人（にんぴにん）でないと思う今日この頃である。

文：山橋由貴子［やまはしゆきこ］（公社）「小さな親切」運動本部専務理事兼事務局長　イラスト：安彦麻理絵［あびこまりえ］